

研究テーマ	主体的な学びで、「分かる」美術にするための授業展開の工夫 －第1学年「広がる色と形」の実践を通して－
-------	---

美浦村立美浦中学校 教諭 藤崎佐保里

I 研究テーマについて

村内唯一の中学校である本校には3つの小学校から生徒が集まってくる。小中連携の一環として、一昨年、昨年と近隣2つの小学校にて図工の時間に授業を行う機会があった。昨年小学校で行ったアンケートによると、「図工の時間が好き：69%」「絵を描くことが好き：78%」「描きたいと思うものがすぐに見つかる：32%」（6年生2クラス合計55名）という結果が得られた。また、自由記述欄にも「絵の具の使い方が分からない」「立体的に描けない」「形が上手に取れない」など、ほぼ全員に近い児童が制作に対してなんらかの不安や疑問を書いていた。また、2割の児童は「みどり色」を混色でつくる方法を知らなかった。この結果から7割近い生徒が図工に興味があり、好きだと答えているにも関わらず、半数以上が描くための技術、また発想の仕方が分からずに戸惑っていることがわかった。また、同じく中学生の実態調査のアンケート結果をみると、やはり多くの生徒が美術の授業が好きだと回答しており、またその理由についても、特に絵画の分野において「自分の好きな表現ができる。」「描き方をどんどん覚えられる。」など、非常に前向きに取り組んでいることがわかる反面、どの学年でも男女とも一定の割合で「絵を描くのが苦手。」「描き方が全くわからない。」という生徒がいる。「分からない美術」になってしまっていることが問題としてあげられる。

このような状態で中学校に入学してくる生徒たちが、中学校で美術を学んでいくにあたり、美術の創造活動の喜びを味わい、豊かな発想をもって自分を表現していくことを目指すために、中学一年生での基本事項の定着がかなり重要な意味をもつと考える。今後の表現活動の基本となる色彩の仕組みと構図について丁寧に学習していくことで、思いつきや感覚に頼るだけではなく、知的な構成力を伴った美的感覚を養い、それを背景としながら色や形をより一層豊かにとらえられるようにしていくことで、「分かる」美術に繋がるのではないかと考え、本研究テーマを設定した。

II 研究の実際

1 題材名 デザイン画「広がる色と形～リズムを感じて～」

2 題材の目標

- 色彩や構図の効果に関心を持ち、意欲的に画面を構成しようとする。（美術への関心・意欲・態度）
- 自分の意図にあった構図を考えることができる。（発想や構想の能力）
- 色彩や構図による効果を理解して、意図に応じて画面構成を創意工夫して表現できる。（創造的な技能）
- 色彩や構図による効果の違いを友達の作品を見ることを通して感じ取ることができる。（鑑賞の能力）

3 題材について

(1) 生徒の実態

本学級の生徒は、授業中の発言も活発であり、熱心に制作に取り組むが、一方では、アクリルガッシュの正しい扱い方など、技能面での知識不足が感じられる。また、色に関する用語も知識として定着していないことが窺える。基本的な色の原理や印象を、用語からだけではなく、実践を伴って経験として定着させていくような工夫をしていきたい。

(2) 題材観

中学校学習指導要領における、第1学年のデザインや工芸など表現する活動を通しての指導事項としてA 表現(2)アに「目的や条件などを基に、美的感覚を働かせて、構成や装飾を考え、表現の構想を練ること」とある。この「目的や条件」を達成するために、生徒たちは自ら目的や主題を設定し、その解決のために感性や想像力を働かせて発想、構想していくことになる。そのためには、形や色彩、材料などの特性を十分に理解した上で、生徒個人の色彩感覚や構成力、想像力などを総合的に働かせていかななくてはならないと考える。

本題材では、色と構図の効果を理解して、具体的な場面で活用する力を身につけることが大きな目標である。この学習を通して私たちが美しいと感じるものの中に必ず存在する原理的な秩序に気づかせ、これからの造形活動に活かしていただいたい。美しさなどを感じ取る感性は、中学生の時期に培われるものであり、それは、生まれながらの資質だけではなく、成長過程における様々な刺激や経験によってもたらされるものである。友達同士やクラス全体での意見交換を通して、さらに違った見方や価値観に触れ、自分の見方を深化させるきっかけとしていきたい。今回は、身近にある「人工物」「自然物」からひとつずつモチーフとして選び、デザインを考えさせていく。モチーフそのものから受けるイメージや機能から生まれる形、また、自ら表現したいテーマに合わせた色や構図の組み合わせを考えていくことで、性質的な面と感情的な面の両面が合わさって魅力的な作品が生まれることに気づかせたい。

(3) 指導観

本題材を通して、色彩と構図の組み合わせを工夫することで自分のイメージする主題に近づけるように意識させている。知らなかった知識を得ることで、新しく生まれてくるイメージを大切にさせながら、発想することへの戸惑いを減らしていけるようにしたい。

まとめとして行う作品の相互鑑賞では、配色や構成によって人に与える印象が変化することに気づかせ、特に作品同士の色相・明度・彩度、また配置の組み合わせを比較していくことによって、分析的、総合的に色や構図をとらえていく能力を身につけさせていく。また、友達と意見交換をすることで、自分の表現したいイメージが正しく伝達されていたのかを確認することができる。今回の鑑賞を通して作品の見方や感じ方などを身につけ、お互いの作品に表現された世界を一層豊かに感じ取り、さらに深く広げていけるようにさせたい。

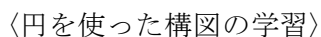
4 題材の評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
色彩や構図の効果に関心をもち、意欲的に画面を構成しようとする。	色彩や構図による効果を理解して、意図に応じて色彩計画を立てることができる。	色彩や構図による効果を理解して、意図に応じた画面構成を創意工夫して表現できる。	構図や色彩による効果の違いを、友達の作品を見ることが通して感じることができる。

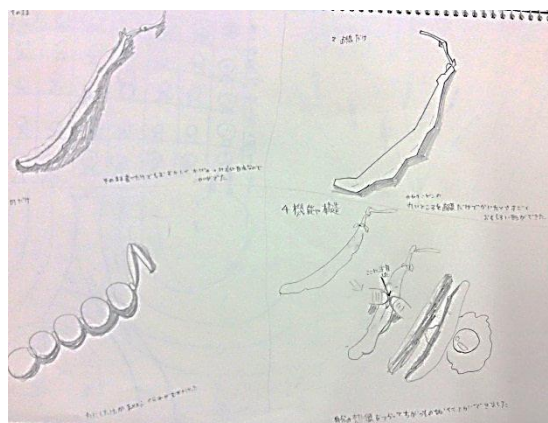
5 指導と評価の計画(18時間扱い)

次	時	主 な 学 習 活 動	評 価 規 準 【評価方法】
1	4	「色のしくみについて知る」 色を整理してみよう 色の感情効果 ペットボトル100色色相環 なんか妖怪!?	色の仕組みについて興味・関心をもつ。 関【学習シート】 色のもつ感情効果について知り、生活の中での利用方法について考える。 発【学習シート・観察】
2	3	「構図について知る」 構成美の要素 モチーフの観察 モチーフの単純化・強調化	自分の意図にあった構図を考えることができる。 発【学習シート】 色彩や構図による効果を理解して、意図に応じて画面構成を創意工夫して表現できる。 創【学習シート・作品】

○「構図について知る」



○「モチーフのデザイン化」



〈モチーフの単純化・強調化〉

モチーフをよく観察して一番美しいと思う形、そのものらしさを表している形を抽出する。また、見た目だけではなく、香りや皮の中身、それぞれがもつ機能にも着目し、イメージを広げさせていく。条件を「見たままで描く」「直線だけで描く」「円だけで描く」「機能に注目して描く」とし、条件を限定することにより、より必要な情報だけに注目して選べるようにするねらいがある。

○「色彩計画を立てる」

①作品テーマ	温度差がある感じ
②使用するモチーフ（人工物1、自然物1）	はさみ・リコゴ
③構成美の要素	シンメトリー・リビテーション・グラデーション・リズム・アクセント・プロポーション・コントラスト・バランス 選んだ理由：温度差を表すためにコントラスト リコゴを目立たせるためにアクセント
④使用する色、トーン	寒色・暖色 選んだ理由：温度差を表すから

①作品テーマ	自然、ほい感じ
②使用するモチーフ（人工物1、自然物1）	バトミントンの羽、木
③構成美の要素	シンメトリー・リビテーション・グラデーション・リズム・アクセント・プロポーション・コントラスト・バランス 選んだ理由：牛物をモチーフにしたから、
④使用する色、トーン	ペールグリーンとビビッドグリーンを使う 選んだ理由：めだちで見た感じがするから。

〈構図と色彩計画〉

下描きに入らせる前に、仕上がりのイメージを言葉にして明記させた。なぜその構図を選んだのか、なぜその色でなければならなかったのかが自分の中ではっきりしている状態で下絵に入ることにより、より明確に自分の思いを作品に反映させられると考えた。

条件が決まってくるので、ここで発想が止まってしまう生徒が格段に少なくなった。

○ グループ、ペア活動の工夫

美術では、制作の時間に入ってしまうと自分の世界だけに集中してしまうことが多々ある。それを解消するために

- ①毎時間の感想発表（1，2人）
- ②中間発表（相互アドバイス）
- ③完成後の鑑賞

この3つの時間を充実させることを意識した。

①では、自分の感想を書き終えた後、1から2人程度の作品を取り上げ、「今日の制作で気づいた事」を発表させた。「どこがどう難しかったのか」、「なにを工夫したからうまくいったのか」など具体的な自分の考えを踏まえて意見を出してもらった。聞いている周りの生徒も自分の進捗と比較しながら改善点などを探すことができ、計画的に制作を進めるきっかけになったと思う。発表の時間がないときには隣同士で気づいたことを簡単に言い合う時間を設けた。

②では、途中段階でクラス全員の作品を観る機会を設け、後半の制作で意識すべき点をお互いにアドバイスしあった。自分の作品を友達に認めてもらうことで自信をもつことができ、その後の制作に対する意欲付けにもなった。③では、学年や題材によって鑑賞の形をそれぞれ変えてきた。今回、取り上げた1学年では、指定された作品をじっくりと鑑賞する時間をとり、その際

色相	さんへ	彩度	構成	(70)番 名前: [] より
系	× 低	× 中	× アセント	作品タイトル: [] 理由: []
緑	さんへ	彩度	構成	(72)番 名前: [] より
× 高・低	× 高・低	× グラデーション	作品タイトル: [] 理由: []	
緑	さんへ	彩度	構成	(74)番 名前: [] より
× 低	× 高	× アセント	作品タイトル: [] 理由: []	

に見るべきポイントがぶれないように意識させた。色の三要素と画面構成の組み合わせからイメージされるタイトルをつける課題を設定した。既習事項の確認がスムーズに出来たために、課題をよく理解し、魅力あるタイトルをつける生徒が多くいた。

○「相互鑑賞会でアドバイスをもらう」

友達にもらったアドバイス：
アウセントで1つだけ色を変えて目立たせる。by 黒

友達にもらったアドバイス：べためりじゃなく、とこ3つに3つ他の色をすこしいれりして、工夫をする事。

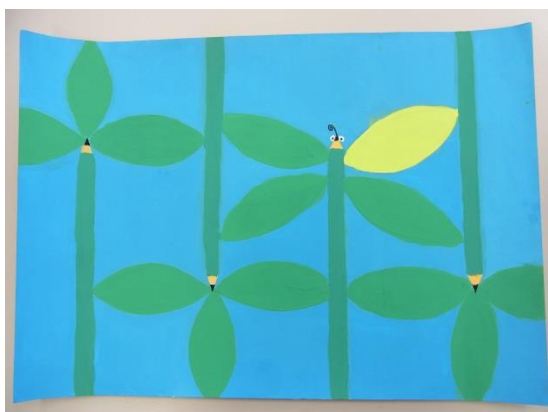
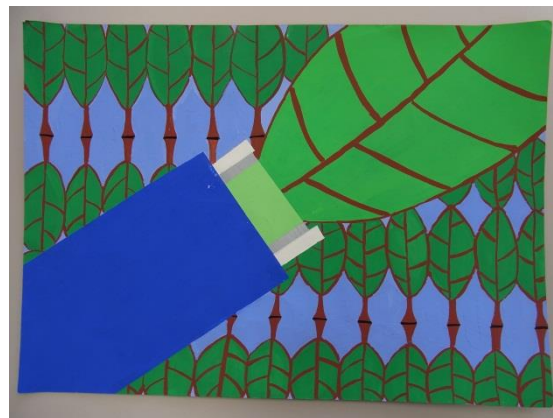
今日のまとめ ～自分の思い（テーマ）を伝えるために必要なことは～	・○○を参照すると良い ・○○を表現するために△△を使う…等
①構図、構成について→コントラストをはっきりさせる。	
②色について→寒色と暖色を区別させる。	
③塗り方について→水分を適量にする。	

今日のまとめ ～自分の思い（テーマ）を伝えるために必要なことは～	・○○を参照すると良い ・○○を表現するために△△を使う…等
①構図、構成について→ちうちょと背景は物をかいた方がよい	
②色について→自然をみながらに明るい色で、自然の色をつかう	
③塗り方について→べためりじゃなくもやみする	

〈中間発表〉

デザイン画の下描きを終えて、彩色に入る段階で、一度友達と相互鑑賞を行う時間をとった。そこで、自分で設定したテーマが友達にうまく伝わらなかった場合、さらにどうしたらよりイメージが伝わるのかを考えるきっかけとなった。友達にアドバイスするためには、自分自身が用語や技法について理解していなくてはならず、お互いに言葉を確認し合いながら意見を述べ合う姿が印象的であった。また、分からないことがあれば自然にファイルを見直す流れができており、発想のヒントをつかむことができるようになってきた。

〈完成作品〉



Ⅲ 研究の成果と課題

造形の基礎となる色彩と構図について繰り返し確認しながら制作を進めることで、自分の表現したいイメージを表すのに必要な要素を意識的に選び取ることが出来るようになってきた。今まで、思いつきで好きな色を塗ってきた作品と比べて、しっかりとテーマをもって制作に入っていたように思う。

まとめの鑑賞プリントでも、ほとんどの生徒が色や構図によって、伝わる思いやイメージが違うことについて言及しており、知識の定着がうかがえた。

気づいた事・まとめ
・ 一つの同じ系会でも人それぞれで印象が「明るい」「暗い」「つめたい」「楽しい」などの違いが見えた。
・ 色がたった一つでイメージが決まることわかった。
・ 物の大きさでもイメージが変わる事、構成が大切なことわかった。

気づいた事・まとめ
自分が最初に考えたテーマや構成などかくすれないようにすると他人から見て、自分が最初にたてたテーマなどにあてはまる人にならと思った。
↓
テーマなどをくすす描く!

今回の実践では、特に毎回の授業で当然のごとく行ってきた導入とまとめの時間に着目し、板書も計画的に行い、「この時間に身につけるべき力」が明確に伝わるように授業を進めた。その結果、次の授業でやるべき事にまで目が向くようになり、準備物（持参する資料や材料など）にも工夫をしてくる生徒が増え、作品の質も格段に向上した。また、プリントの内容やまとめの仕方もポイントを絞って行うことで、誰にでも「ちょっと分かる美術」に近づき、「分からなかったけど、まあいいや」という態度から「分からなかったら自分でまとめた資料をみよう」「もっと知りたいから調べてみよう」という前向きで主体的な学習に繋がっており、大きな成果だと言える。

2学期末のアンケートで「先生が色の使い方などを分かりやすく教えてくれて、自分の考えを否定しないでくれた。」「あんなに失敗したのに、いいところを見つけてくれて嬉しかった」という回答が印象に残っている。「絵を描く事が下手だから美術が苦手」と言っていた生徒も友達や教師から認められることで自信をもち、その場で足踏みしていた足を一步前に出すことができるようになる。50分の授業の中で1回でも小さな「分かった!」を見つけてもらえれば、その子にとっての授業は成功だったと言える。子どもたちからもれる「わかった!」「あーなるほど!」という声を大切にしながら、美を感じる事への喜びや楽しさを味わわせていきたい。

今後の課題

今回の実践は「分かる美術」にするためのスタートラインに立ったばかりであると思う。「分かる美術」はこちらから一方的に情報を与えることではなく、与えられた情報をもとに、必要に迫られて自分で調べたり、友達との意見交換を通して世界や価値観を広げたりすることで達成されると考える。子どもたちの興味を惹きつけ、なによりもまず子どもたちの「もっと知りたい」「もっと表現したい」という小さな探求心の芽を決して摘み取ることなく一人一人に合わせて育てていきたい。